優秀賞

命の源・水

富山県　高岡市立戸出中学校　三年　稲場　結奈

今年の三月私の祖母は癌と診断されてから食事をほとんど取らなくなったが、水を欲しがる様になった。水を一口飲むと、細くなった食道からゴクリと音がして「あーおいしい。」と何とも言えない表情をする。その柔らかい笑顔は私を幸せな気持ちにさせてくれる。祖母にとって一口の水が命の源になっていると実感させられる一瞬だ。

昨日、宿題をしていると祖母が「喉が乾いたから水ちょうだい。」と言った。「この問題解いたら持ってくるね。」と言うと同時に台所で夕食を作る母が「今すぐ水取りにおいで。」の声。蛇口をひねりながら「後少しで数学の問題解けそうやったんに。」と恨めしく言う私に母は「何キロ先まで水を取りに行ってとは言ってないちゃ。たったの八歩か九歩や。」と笑う。

その時、以前テレビで見た発展途上国の映像を思い出した。生活に必要な水を得るために、水汲みという重労働を女性や子供が家族のために毎日何時間もかけて行っていた。そして映し出されている水の色は茶色く濁っていて祖母が飲む透き通った安全な水とはかけ離れていた。その国の人々はそれを生活用水として使っている。体や顔を洗い、洗濯をし、そしてその水を飲むため、単純な下痢性の病気で毎日体の弱い人や子供達が何人も命を落としていた。もし水道施設が整えば、水によって命が奪われる事がなくなり、祖母が飲む水のように命の源になる。

水は人間が健康な生活を送るために真っ先に必要なものだと思う。私達は自分達の国だけ良ければいいというのではなく、途上国が十分に安全な水を得られるよう支援し技術や資金を提供することも国際社会における日本の重要な役割だと思う。水によって消えてゆく命と、水によって生かされる命。同じ地球上、同じ命。水で悲しいことがあってはいけないことだ。水が簡単に手に入らない国や地域があるということを把握することでいかに水が素晴らしく重要な存在か、そしてこれから先進国として水とどう向き合っていけば良いのか考えなければならない。今、私達ができることは、水を汚さない、無駄に使わないといった当り前のことはもちろん安全な水が足りない社会に住む人々に心をとめ、できる限りのことをすることだ。

私は小学六年の夏休みに人権を考えるというセミナー合宿に参加した。友達になった福島の女の子から教えて貰った話は、東日本大震災のあの日不安や心細さでパニックになりそうになったけれど隣に立っていた人からペットボトルの水を貰い一口、二口と飲めたことで少しだけ落ち着くことができたのかもしれないという体験談だ。水が人を癒す力があることを知れた夏だった。

普段、自分が水をどう思って、どう使っているか。生活を振り返ってみると日本の豊かな水の尊さがわかる。私は蛇口をひねれば透き通った安全な水が止めどなく流れること、コンビニエンスストアでも簡単に水を手に入れられることに感謝すると同時に、できる限り早く世界の水環境が改善され、誰もが癒される命の源・水と共にある生活が送れるようになればいいと思い祈る。